

高知憲法速報

No.250 2011. 2. 25

発行:高知憲法会議事務局 088-872-3406

編集人 事務局 徳弘嘉孝

2011年3・1ピキニデー 2・27~3・1静岡

1954年3月1日ピキニ環礁でのアメリカの水爆実験によって、マーシャル諸島島民や周辺海域で操業していた日本のマグロ漁船の上に、強い放射能を含んだ「死の灰」が降り注ぎ、焼津の「第5福竜丸」無線長久保山愛吉さんが死亡しました。これをきっかけに核兵器禁止を訴える署名と運動が広がり、1955年原水爆禁止世界大会が始まります。昨年 NPT 再検討会議は「核兵器のない世界」を目標として確認し、すべての国にそのための努力を義務づけました。2015年の NPT 再検討会議に向けた新しい「核廃絶」の署名も始まっています。今年の集会には室戸市の「第2幸成丸」元船員の桑野浩さんと船長(故人)の奥さんが参加して証言します。最近解禁されて明らかになった米エネルギー省のレポート「キャッスル実験による地球規模の放射性降下物」についても報告されます。

「新防衛計画大綱」と「統合空海戦闘構想」

昨年12月に閣議決定された「新防衛計画大綱」は、「基盤的防衛力構想」から「動的防衛力」への転換を基本に、日米同盟を深化・発展させることを打ち出しています。具体的には南西地域の軍事力強化、海外派兵を持続的に実施できる能力の増強、日米共同作戦の強化などを打ち出しています。世界の流れが、紛争を平和的・外交的に解決するという地域共同体の発展に向かっていくとき、軍事力強化は時代錯誤、時代逆行といわねばなりません。

この「大綱」の背景に米国の「統合空海戦闘構想(JASBC) (JOINT AIR SEA BATTLE CONCEPT)」があります。これは2010年2月に米国防省が米議会両院に提出した「4年毎の国防計画の見直し(QDR)」の中で公表されたもので、慎重な表現ながら、中国を「可能性ある相手」と見立てた戦闘構想で、第1列島線(その南の延長線を含む)に日米両国の海空軍による人為的障壁(「琉球バリア」)を作るという構想です。「統合空海戦闘構想」がすすめられれば、日本の基地と自衛隊はどのように組み込まれていくか、平和委員会代

表委員内藤功弁護士の論文の一部から紹介します。

@「米海軍と米空軍が相互に行うべき重要な作戦」

米空軍は、中国のISR(情報,偵察,監視作戦)や、海面監視用宇宙施設を攻撃。長距離攻撃突破作戦を実施。中国の遠距離海面監視システムや弾道ミサイルを破壊。ステルス爆撃機による攻撃的機雷敷設や、非ステルス機による艦艇攻撃。これらによって米海軍とりわけ空母の活動可能の自由を拡大する。一方、米海軍は空母の戦力により中国のISRや戦闘機を制圧。米空軍の空中給油機、支援機を支援する。

@日本のきわめて重要な位置

嘉手納、岩国、佐世保等の基地は、中国の弾道ミサイルや航空攻撃を受ける攻撃範囲内にあり脆弱である。米軍の大部分の戦闘機は東日本から長距離運用を行う。日本の基地については、選択された基地の強化、滑走路補修資材の増加、主要司令部や運用拠点の地下化や山岳部への移転をまず行なう。自衛隊の対空ミサイル防御システムと運用を米軍と完全統合する。米軍戦闘機を攻撃に向けるため、日本の現有4世代戦闘機の増加と、次期5世代戦闘機の調達。日本にあるイージス艦はBMD配備に就く。米空母は中国の脅威レンジ外に移動する。潜水艦は前進配備。同盟国(日本)潜水艦と共同して対潜水艦作戦(ASW)を第1列島線内で実施する。巡航ミサイル潜水艦、攻撃潜水艦、同盟国(日本)潜水艦は、大陸沿岸エリアで、ISR(情報,監視,偵察)及び攻撃任務に就く。

@自衛隊の役割

自衛隊の航空海上戦力は米軍戦力を補強して、任務の一部、対潜水艦作戦、水上ISR、水上攻撃、ミサイル防衛を実施する。特に対潜水艦作戦としては、琉球列島の特徴を生かし、米海軍と協力して、対潜水艦バリアを構築する。まず、第1列島線の東側の中国潜水艦を排除する。次に「琉球バリア(第1列島線のライン。第1列島線に沿ってルソン海峡、バシー海峡以南までも含む)」を通過する中国の潜水艦を補足して対処する。この「琉球バリア形成」には海上自衛隊の対潜能力が極めて重要な役割を担う。

この論文を読むと、与那国への陸自配備、潜水艦22隻体制への増強、那覇航空隊の2航空隊への倍化など「島嶼防衛に即応した機動的防衛力強化」が、単なる尖閣列島衝突事件への対応にとどまるものではないことがよく判ります。